諸國方言

物類稱呼

禽獸夷

二

ホ 2
619
2

明治文庫
加2
619
巻2

物類稱呼巻之二

動物

馬

むま○下総ではハ。まあとゝぶ同国猿島郡及び下野国にて
ハ。まあめとゝぶ外ぶ国にて。牧めゝんめなどゝ下にめの字を
付てよぶ。先ハ今つゞくらくをゝひゝなどゝ云ふ物をいゝ(つゞ
ゝ)めばゝをゝめゝといひたゝひて古代の後の世にまでもあるもの
なり。牡を伊勢国にて。まるゝとゝ。牝馬を奥及南海にて
○かけざとゝ和国及ひ又ハ上総にて。だまともゝ。だるともゝ
犯ハ和名におひむま今ゝ小荷駄なゝ。又法国にて。ざふやくと云
ふ意ハ軍ゝに用ひむまのゝ雑役につゝかふ
ゝ。○特牛を武州及び中国地方にて。こゝとゝとゝ云

牛

宮城文庫蔵本

野猪

ゐハ○こてとゝふ遠江にまてハ○あこととゝ○犢を西にて○屠でのゝ
とゝふ○中ゐ東国ともに○べことゝふ又こうてとゝひこてとゝふハ 和名
ことひめ猪なゝ又牝牛ハ諸国ともに○あめうしと呼なり
いのゝ○牡を西国にて○うのをとゝふ牝を○かるいとゝふ○兒牧
江戸にて○凡ほゝとゝふ武門にて○こぶうこゝとよぶ

狐

きつゝ孫○関西にて○夜ハ○よるのとゝ呼ぶ西国にてハ
○よるのひとゝふ又関西にて○けつ孫とゝぶ又京にハきつと
も孫ハ 詩経にハくゝ孫と刺ふ又東国にて○ハ○ハきつ孫夜ハ
○いうゝとゝふ○常陸のゝにてハ白狐をとゝふ○ハ世俗きつ孫を
稲荷の神使なりとゝふ故ふ稲荷の二字を音にとゝへて稲荷と称
するゝ○又竜狐とかゝりて物の怪をよびとゝる変あり○予ハ
婦人兒女のゝものにをそれ○又ハ拘いまいとする人かゝる迂遠の説を

猫

さるゝ○成ハ蛇のゝと夜ハ出こゝひ○又灯心とゝもせおとこと云
灯心を測る事をバやとゝふと云又見られて鼠を学ぶのを忘むゝ
をとむれバ孫と八ゝ○ゝ○おまゝとゝふことハ 職人尽歌合にもゝへ
ゝと又京都にてひめのゝとゝふ物を愛ハのゝとゝひ秋ハあのゝとゝふ
ねこ○ゝ猫のゝにて○山猫ことゝ云 これハ家に飼ふ 実ハ武蔵ともに
○乃ら孫ことゝふ○東国にて○ぬをねこ○いとゝねこともゝふ
夫木集 まくゝと東下ゝひあゝくのゝ猫のゝつけゝきハ妹ゝゝゝゝ 仲正
この歌人家にやゝなゝ孫猫をゝ猫ゝゝゝゝ又飼猫を東国にて○
とゝゝとゝこゝまゝのひゝのかゝゝとゝゝづく
今俗に猫とゝゝふハ虎にゝる歌にゝゝとなづくる歌道
和名 孫こまゝ下略して孫こゝとゝふ又こまゝとハ孫こまの上略なり
かゝゝとゝふ事ハむゝゝゝゝこまの玉金沢の文庫にゝ庫ゝゝ

をとうとせて絢めりに、紅中の花ふせぬか梅こを繁て来るを
猫を金沢の庫裏こと称と金沢を略してかるとぞ云なるべし
ける 鎌倉志 に云金沢文庫の旧跡は称名寺の境内にあり俗
のうしろ乃切通その前の畠文庫の跡へ小條越後守平顕時
このところに文庫を建て和漢の群書を納め儒書の黒印
仏書の朱印を押と有又 鎌倉大草紙 に武蔵金澤の学校
は小條九代繁昌のむし一学問あり旧跡なりとあるべしいまも
苔沢の沢にて猫兒を飼ふにさき人仏形猫をこざる為
へで猫のぬし是は金沢猫ありと言訳を常語とす

花山院御製歌に

玉葉集 ［詞書］高屋まとよあらめ庫猫を思ふ猫ふと求めやう
又尾のうしかきを上佐まそ は 。かぶ猫と称と実西まて は 。牧

庵と呼東国まそ は 。牛庵尾とふ 東鑑 五分尾とあり
裕ず〇冥西まて。よめ又よめ尾とふ上野まて。萩のこの又
よめ又むふく又むとあなとのよいよ東国まも よめとふ所多し
遠江まに は 年始よむかりよめとふ其角の発句に

明る秋のかのこれよめがきこ

源義住去来吾隙衣より之頭ける嫁の尾と云にや
年伝は去るべどで野坂云嫁の尾の人春氣まて梅どるんのるるを
今梅に年の始は方のこの後迫と毒付る物ふしあまは藤起と云
へる迫を忘悔でい祝つむいまあぐるなど唱言るたびに敷るる
嵐も孫のひど紀を尾れは嫁の尾人又春氣と
ふ時は毒二月のことれは嫁の尾人春氣と
うごろもち〇京にて。うごろもち東武まて。ぐごろもち西まにて

○もぐらつきまにて。むぐらそらつきまにて。をごろともち遠にて。いぐらもち大和及伊賀伊勢にて。をごろともち越後にて。古語といふ

蝙蝠

かはもり　いみしゝ　かはほり　○秀円にて。ばくひるとも云近にて。故島とよぶ

新撰六帖に名望円大長

月ゝれは新に花ふかきやの扇の風やきぬしかりなる

又。拾遺に

ゝるゝこひしきものはそのうはおもと書れし扇

の事なり

鼠

むさゝび○秀円にて。野衾とよぶ。東国にて。そゞ川とよぶ雲州にて。そゞちゝきとよぶ。薩摩にてつもまとよぶ

もまとハ和名をこの鼠なるへし。古河に大和国春日山

川童

がハたらう○秀円及九州にて。がハたらう又川のとの又ハ河童とよぶ九州及諸国の柳川むなし　同防及石見又宗にて。えんこうといふ

古俗の云民ハ。ぐハたらう又かゞらう又えんこうともいふ又肱

よく左右に西ゝぬけて潜ゆく。猿猴又仏るゞ故にのたゞ即も云

こうといふ

東国に。かつぱといふ　川ゝぱのちゞうる語小兒を

伊勢の白子にて。かゝゝ小僧といふ　越中にてがゝゝといふ

きかゝちぱ人家ばかりのわらはのごとく。かゝらの毛赤ゝして

鷸 鴫 四月なきさる。水をたくふる河ハ力はなくつよし。蟲相撲

をぬくんをして牛にひきいんとも。或ハ牡をなして婦女或

牧媚也。ちつさいひを避るにハ樓を飼ふまつぶとなん。又九月よ

り海の人泳吟する所に

〇いかへのやくさくせとつまるよりかぶち男氏ハ蕎麥

右の所を吟泳れて害をのがるをよしいひつふ

雎鳩 ちさご 〇樓及て。ふさくだ伊豆後河国にて。びさご薩摩

ゆて。びさごとつふ

びさごびちやごともに。ふさごのあやまりなり

刀鴨 こがと 〇越後にて。あじとと云奥及ハ。たふぶと云実西実東

にてたべとつふ則和名抄

鷸鷸 つぶり 是和所に通るふかとう 〇武州及ハ東武共に。かい

つぶりといふ上総にて。ふかとつふ長崎にてハ。鳰とつふ古佐国にて

。いちつぶりと又いよめとつふ遠及にて。めうちんといふ東ふにて。むぐつる

武の神奈川にて。でつてうむぐつてうとつふ上及。かハぐるまといふ

信及にて。めうなしと云後河にて。ひやうたんごつふ仙臺にて。かハ

きゞとつふ

白石翁云ふほとハ湖をいひぬれハふたとハ湖中にあるの実ハ

あれ角一又かいつぶりとハちゝ水に没する音をかさどりいひ一と

及ゝ云ふ又俳諧師支考がいふく。おりの海とハ鳰鳥のもむ所の

さゞ波ちれハおりの海とゝ。今梅に烏ハにひ色の実ハかほの海

とハ。うらくと日の出るに海のふほへるなりぶりとハ香のことに

あくび。数多のことゝ。光源君のこと我。桐壺の巻にハ沈にう

ひまハといえり。又法橋昌長翁のいとく。研師及を所上てそれ

に色を付るをあをひをつけるといふ。別、場の脂をいふとあり又
ふるふ辰などを日に映ずるといふなり

鷗

かもめ○中國よりいふことなり。紀和にて。泊こどり又大鷹といふ
沖みよむ鷗いと佐ゆるまで。かごめ。らふ。摂及武の品川にて。うら
孫こ手牧て。濱孫ことも呼ぶ近江にて。苗代鳥又。泊こさぎとも
鷗のゆく方猶のなかに似るゆ。故に異名ともに 系葉集 に加萬
目又鴨妻と書く。鴨妻とハ鴨のとくにてふしきなるをいひ
なるべし。一説ふ。沖にあるをかもめ。磯に集をいそちどり。沖に
泊舟をとるを船鳥といふと。直龍箱の説なり未詳

魚物

かハせを 一名少微 ○中國にてどう京都及東武にて。かハせを
武州及下野にて。そなを奥州仙臺にて。すがむどう出羽にて
○るゆを下総にて。ちよかを甲斐にて。そびを後河に沿岸辺にて

鶺

信天翁

○そびを加州にて。むどう奥州及備前にて。ちよに伊勢及出雲
肥及豆國にて。ちやうび或ハちやうびん薩摩にて。ひをいと称す
かハせといふるハ沖山そびと云物あるに對ての名なるを薩州か
沖山ひをいとよ東武にて沖山ちやうびん或ハ前によりてハ水鳥
と云又清盛ふどう夫名にて。ちよ故ハ鳥の名なるを薩州
付と云り実面にて面白ものと称するもひるるなり

紀 とともに翠鳥と有

かさぎ○西国にて。唐がらすと云又○高麗島と云五畿内及東武に
ちよ。鳩ようり小羽に黒白ある天武帝御時新羅より鶺一隻を献ず
らい○九州にて。らいと云土佐国にて。とうくらうと呼丹後にて。あるう
ものと云長門にて。沖のたゆふと云ひるうんちく白鶺ちく脚赤
かが賀玉白山に鶺と云ものを同名なり

〇白山のれのこかけにかくろひてやまちにさまる鶯のちかい

秧鷄 鶏

くゐか〇仏臺にて。なますゐるを呼 まゐ寺戸をたくに仏ゐ国て たくくゐ鶏と京に云を

かやくぐと〇東武にて。ぐとちぎと称せ後河にて。かんちんゐると呼

ちくにれもてるてかやくさのいて尾茶の来にうちん

月令 に三月田鼠化して為鴽とあり是なり

蒿雀

あをちく〇遠江にて。きちちんと云東武及国にて。あをでと云

京洛にて。きぢやうと云 鶏は似て きちちのあり

きちちを略俗にてあをじと云鶏は山林に在て野にいでず

青ちと〜ハ藪林にきひとものあり

畫眉鳥

ちうぢろ〇遠江にて。赤ちんと云

きちちちといふ物を片仮名付又ちちとちちのもの

ものを後漢と云ひる巧にきちをなを故に東武にてハ一名を後上山

百舌鳥

とゆくと云遠江にてハつんと五粒弐条まけさと云くと云薩摩にてハ

をちらぐと〜ハ三八二十四と鳴と云歐陽公詩百囀千聲隨意移と云

呉域同様なり

つぐ〜〇文政内の俗。つむぎと云武蔵にて。つぐと云

かごめと云遠江にて。つぎめと云仙台にて。つぐと云

本朝食鑑 鶫 釈名 馬鳥 鳥馬也 蟠姑 をつちぐさ和てはるをれ

赤武にて和てるをまはと云又談にけら後さてびつくとろこぶと

いるもかるる事を云あや京師にて保叔毎に花を食を後例民

繡眼兒

めぢろ〇薩摩にて。花吸と云上総にて。をうまはること云

布穀鳥

つどとい ふーへ〇伊豆駿河辺にて。ちとぐるを云 土人のいくはるに 四のあはとぞ

牧母鳥

かつこうと 俗かんこ 〇甲武にて。ぐとぐと云東武にて。ぐまきるる

ぐとぐ 大和本艸 よいく 俗ぶかんこるを杜鵑の啼くと云ものを

杜鵑

うぐす 本朝食鑑 に云ほとゝぎすは樹に上つて鳴く時ちかきあたりの樹梢に在るなきなどゝきすなはち則むしくひなる故に世俗なにとてさすの異名とす 今按に此説によるときハなどゝきの異名ハ虫喰鳥なり、かつこどりとてらくハ杜鵑の雌にてハあるべからず。杜鵑ハ鶯の巣をかりて子を残せしかつこどりハ頬白鳥の巣に子をあづくるとりのなりなどゝきとも○伊豫国松山邊にて○こうてどりと称も是子規一名を沓代なるといふつてこうて轉じたる詞なるべし

燕

つばめ○但馬国にて○ひいごと云播磨にて○ひごと呼
和名 に 爾雅集記 を引てつばくらめと注せり今俗につばめといひ又つばくらと云ハ後人それを略とぶきて呼也片田舎の人ハつばとばかりも呼。又哥にハつばくらめともつばめとも詠とつばくらとハ詠於なし。俳諧にハつばくら太郎なとの又つばくらめとハ土くらひの

和訓栞と篤信翁の説あり。又胡燕。越燕。漢燕等を胡燕やまつばめと云 越燕よりハ稍大にして山上岩穴にすむ巣ハ横に長く徳利の方より出入を。越燕ハ巣の上より出入を但馬国村民にて妙見ひいごと云ハ胡燕なるべし

斑鳩

つちくれどりと称く 古俗の○東国にて○きじばとと称と西国にて與地次などゝ呼 関西にてでゝつぽうと鳴といへり東国にててゝつぽうくくかアほうくと鳴くといふ

木啄鳥

てらつゝき 又けらつゝき○江戸にて○きつゝきと称を 又東国にてとをげらと呼下総にて○番匠なると云

鴞

ふくろふ○常陸国にて○孫こゑと称も このなるよく巣とれたろてかくあづくるにや 上総にて○よごろと呼 伊勢白子にて○ゐる匠とよ
挙白集 にのりすりおけと鳴くをのれが毛衣の料よとぞ又俗に夜明なば巣つくらうと鳴とも又片田舎の人ハ五郎七ほうこうと

鵠鶏

ゝそさぶい　上古○奥及そ○ゝそぬとそ仙臺にて○ゝそぐぐとゝ能
あて○ゝそつぐと呼西國そ八○ゝそつぐと云
或説よびゐる藩のゐに二累棲て長と。加にゝでさんざいと名付を
ゝそさぶいとゝふとで　今按に。ゝそ、八藩ありさぶいいふ〳〵さぶいと
いひ名の物〳〵るゐ。さぶとハさゝやゝるゐるゝ小きゐゆへ二累といふ白
累にハ好ざるべし。又鵠と云ゐにハもろくのハゐる怖きてゐるゐ
鵠も鷹の屬也とゝふ。それ弗にゝてさぶいハ弱て怖ゝ。却物城
ゝ外の虫を捕て鵠にあゝふ。ゝ時收ふ新ゝ食ふ予正に是を見ル
せきれい　和名ハくなぶり日本紀私記○播磨にて○かゝらすめと云西ま
及國又ハ奥及ゝて八○いゝたきと呼伊勢白子にて○ゝまてめと云
遠江及上総常陸にて○ゝまゝたゐゐと云東國にて○せきれいと云薩

鯉

剖草鳥

摩にて八ゝ英及なるゝものを○いゝたゝきと云里俗ゐるゝものを○せきゝ
ゝいゝと云　旧説ふハふゝたゝきともいゝたゝきゝも
いるなゝふせるゐるゝも及ゝゝゝ
よゝハらゝめ○家内及物及也○よゝハら花と云
よゝハら花とゝふハ剖草ゐゝ殿をゝるゝて。ゝ中の虫を啗ふ加に
ゝ名ゐゝと石川丈ゝよの説ふゝ
出ゝ及中ゝ國にて八○ぎよゝゝゝと呼　古佐の國にて八○ひぎゝゝゝ又
加賀ふて○よゝゐゐと云播及ゝて○けゝゝと云仙臺ゝて○かゝゝゝゝと云
東ゐゝて○ゝきゝとゝふ
あゝをゝとゝハゐ物ゝゝるゝものゝ云ゐゐるべゝと徂徠翁の説なゝ
ゝよゝハら花の羅波のゝゝあゝも多波ゝ物ゝ多のかまびゝゝきハ
いゝゝゝや　「よゝきゝの浮世もゝゝゝやあゝのゝ　五百山
こい○武義ゝにて鯉魚のゝゐゐるを○ぬんゝゐゐと称ゝ

鰤

鰌

元八文正とゝ云をあやまりて呼べし或時予が僕の鯉を庖丁せんとて井のもとへとりて井の中へ落しぬとゝひとぐりくれば拒可よとゝ云

「つゐぢく井筒にこひと云ハ川うむ」男も今の男も　吾山

たなご○実和名抄　たなごハ鮒の新へ又海に棲る魚

○ふぐぶなと云　たなごハ鮒の新へ又海に棲る魚

なよ〜　此魚の異名へせにぐらと云　日本紀に云吟味されなり○極小なる物を江都にて。をごと云　東国に小児をちがこと云　かゝにて。ちよぐと云　土佐にてハ　あにゝ魚の小なるを云　いさなごを土佐辛と云　小なるものを実和名抄東ともにいなと呼　いなゝ稲の莖くされて魚と成　張びしこと云　とゝへ物ろ時ハいなと稲魚なり〜　いふ〜へハ魚を魚と称せ〜なり。洲　洲を遠にて。はゝ〜ぢと唱ふ

漁人簀の口方に弧を張て魚をとる簀門と云国く簀魚の名也

一説に魚河と海との湖境を往来する瀕を簀して洲魚の名也

江戸にてハ六月十五日より洲を呼十四日とゝいふと云九月にてう

泥味ゆく脂多くしてゐよく味ひ美也又さゝふし法ふさるゞ如し此時を考問まて。こざら〜江都と称を泉州堺の名産なり

○なよ〜。ぢら。伊勢ごい長崎に。まくちと云　勢州及尾張にて。めうぎちと云

いせこいとハ勢州の海濱にて多くこれをとる又鯉に類するを

そゝていせ鯉と云実和の称なり東国にハぼちとのゝ呼べ又まくちと

上方にくちめといひ一向の送りくるめうぎちとハ名古の音訛と和名抄

たひ○豊前にて。へいけと称と蟠龍子の白鯛を屈へけと云ハ平魚

なるべ〜　延喜式に平魚　今按に東武にて安房の鯛とりの物を他所

戸塚ゆゞにてハへいけと呼又土佐の海へ〜ぶひと云ものをへうごと云

是也も平魚の類なるべ〜

○桜鯛　堺港に桜鯛乗民場の名産なるべし。麦藁鯛中国国ともに

棘髭魚

四月出る鯛を云。春の魚津の浜にて称也　扨武州文社おれ伸たる地を春の魚と呼武にて江戸称う

とゝゲ　○其鯛　武州東武きにあまごひと呼出さにて。こびるとゝふ

実東にて。奥津鯛と呼　奥津にて多くこれをとる　鱗に富士のかがちをとゝつゝふ

くろだひ○東武にて。くろざひと云　武州及中国九州国ともに。ちぬ

だひと呼　鯛泉及筑紫津浦よりこゝ多く出る也　ちぬと号し。他

ちぬと称魚と大に同てふくゝる也　紙とも今混して名を呼又小数地と

○かいずと称を泉及貝津丑ふて色をとる国て名とし江戸にそ芝浦

に多くあり

比目魚

かれい。ひらめ○武州所ともに。かれいと称し江戸にそ八大なる物を

○ひらめふるゝものを。かれいと呼紙とも類国くして稀に大地に

下総の浦くにて大なると鰈とゝひ小なるを平目とゝふ江府の魚市に

むる時八則名を変ず又ある漁ふ小魚を相偶して浮沖と称

鳥頻魚

紙をとゝふ時八九右の遠ひる物なりとゝふ貝東ゝ八かれいとゝふ

かれい魚の異なりとゝふ

越後ふてふなる地を。こつぺらと呼　こびるめと　この誤ま

○さゝひとゝ江戸にて云　翔月びるめを越後の系魚川にて。あさだ

とゝなづく江戸にて。ほしびるめと駿河にて。まつかびるめとゝふ　紙。この

くれいとゝふ　泉及にて。岩国かれいとゝ

うしのしたと　一名くつぞこ　実西及東国の海にて。うしのしたと称江戸

にて。ぢびるめと呼　備前に八。くちげとゝ越前にて。ぢぢれいとゝ

きすご○実西に。きすごと江戸にて。きもとゝ伊勢白子にて。あめ

の魚と云　西ふる日多くとる魚　故に名とゝ紙とも　紀及にて。だうかうとゝ

あこ○加賀にて。てちめと称て　ぴ魚摘磨　摘津ふるゝに紙に

ぢぢ月藻魚の大なる物を。あこと呼て貴敬と

鞋底魚　幾須古　阿古

和漢三才図会　三八

藻魚 目張

えさう又あこ、赤魚と云

もうを○西国にて○いそめぢると云

めぢる○陸奥仙臺にて○ていと云又ていともいふ

蒸炙にしめぢるの兒を呼てあること云一説に沖めぢるとも云なり

味ひ美し病人食ふことなしと云

竹立子魚 伊佐木 鮸魚 女

かさご○奥羽にて○こがらと云かさごびなり

いさき○奥羽にて○奥鮴といふ

あいなめ○奥州にて○祝うをとのひ又ちんだまと云同じ国にて八○

あぶらめと云佐渡にて○ちぐうと云後羽にて○魚ろと云

本朝食鑑 小形粗鮎に似る故に名づくめと称してあめの雌ふハ

あゆび又 日本紀 萬葉 等に魚をなると訓ぜり今按に尾張国又武蔵

の和泉にて川魚を小魚と云又江戸にて鯛魚を魚屋へ肴と云也

保宇 保宇 方頭魚

ありまさ薩州にて八魚肆をちやや町と云也なり奥羽の方

言に祝うをとと云ちんだまといふハあいなめを祝うを女と云云に

て孫うをとのひ又孫新と云なるべし又魚ろといふハ東国所部

の小兒舌のことをいふ東国にても舌を魚ろと呼ものの稀なり

されハあいなめと云をなめるといふ云ることろ也て後羽にハ魚ろと云

つくる所なるべしと云ハ異説にて奇問にて採ぶること云におろ

かなり○佐渡にて○きこうをと云薩州にて○ぶこの魚と云

かるがら○参河にて○かあごと云越後糸魚川にて○いぢと呼

常陸下総にて○ぎすと云かるがらと角あてくらと呼

石鮒魚

むいつハ○羽州にて○あさぢとのひ又あらぐ恵又山ぢぐ恵ぐ呼

京都にて○といつハ摂津にて○あらもと云

京師の俗大海川と略しておのつハと云又赤えもと云ハ赤斑の

鱊　鯈魚　丁斑魚

畧(りやく)なり又小圓とておいかと呼魚も同名異物(いづう)也
いさざ○小田原にて○か孫と云京師にて○だんぎぼうとよぶ
京にて見るいさざ是にだんぎ坊と云見るの条下にくはし又信濃
ちやめんざことよぶ是ハさば魚の乾(かし)たる物也又駿河にて○かたたきと云ハ別物也
どろめ○大坂にて○ごろめと云筑紫にて○ちゝうとゝ呼ち佐渡にて
○どろめざことよぶ　此魚三月海より川水に上るを簗(かな)にて是を捕(とら)
長三寸江戸に云白魚より小さし潔白(けつはく)なる白魚に相同し氷魚(ひを)と
と呼も又是に似たり近江の湖水(こすい)宇治の田上(たなかみ)などに産する物也
めだか○東武にて○めだか京にて○めざこ又○うきんぢよ又○ざんぎ
ぢよう大和にて○こめんぢやこ南紀にてハ○めたゝき大坂東南にて○う
きゝ大坂西北にて○こまいぢやこ和泉にて○めうぶり周防長門及近江国
備前にて○めゝぢやこ伊勢にて○めだか又孫ざい周防白子及び
美濃にて○こむい尾張にて○うきす奥州にて○孫んまち又○めんぢい
相模三浦辺にて○びつこ出羽にて○めんぱち同国庄内越後にて○うる
め信濃にて○うきいを土佐にて○あぶらこ肥前にて○たうぜ越中にて
○かわさ又○こめざこ陸奥にて○もろこず周防南部にて○めざこ又めぬ
け出羽最上(もがみ)にて○ぢよんぢうこ　一書云　按るに京師にて見るの是名を
だんぎ坊とよぶハ元僧(がんそう)の経論(きやうろん)も見えたに魚是を池に放生と云秀句
まで談義坊といふ事ぞ又江戸半太夫節の浄瑠璃にくらされ同の
かはしさハ月日のたけも水なる此下略ス　此文句其を見ず是を水に云かけ
るみぎはぞの仮名ハすのさま水ハうづまきつの雪かの魚の身も浮しるも
くらしからさるゝ守武大人の句に
「ちろ花を南無阿弥陀仏と御辺りに　守武ハ伊勢内宮の
神官荒木田氏連歌を好て【新撰筑波集】にも入し俳諧の祖

鮫魚

諸の鼻孔あり大の白ハいふとゆつとせるまつ化仙ものこと多べし
又ハ吟を辞世ありと後人おもふハあやまりと天文十八年八月八日七十
七歳にて卒を辞世

「ちりからもまさゆく末も神詠ふみ称の松風く」

さめ○播磨にて○のそとふ越前にて○つ●ものとそこの故ハ鮫魚
捕て磯へ上れば仮名のつのあれ形に似ようとて越前の方言につ
のつまとなづくと也。大和にハ○ふりと云。さめと鱶魚ハ大に同し
くしてせこく異也。ぬりの形異し或ハ白ぶらうぐぶつかせぶつ鱶ぶつ
もどまさぶいつ等ものの新名及九州さめの称也
もべてふと呼又江戸にて一種○ぶしあと云こと野ふ方言の
まそハ○さがぶりとぶものも江戸にて云○刀ざめと西海にて○のう
そうと云江戸にて○当ちくざめと云○佛坊ふ

王鮪

毛ぶ仏の国にて云○かせふ方言にて○又ハ及にて一種○ゆでふらふと
船場よ人云ハ尾をもてなて海にて
ちび○茅門にて○ちつと称を江戸にて○まぐろとぶ江戸にてまぐろ
のせきとふものを茅門にて云つのとも云又江戸の魚店にてちび
○まぐろ○びんなが等の別名とも東武の俗語まぐろと云紀
州にて大なるもの○むしハ江戸の魚市にてまぐろを賣ふこと
まぐろが近年ハ多く来るもん又びんながとゆへる物へあぶらを去て肉粕
とるものと又二尺以下の小まぐろを江戸にて○めばちと云一名○そうぶ
と云○ひらそうぶ○九そうぶ○ふなと二種共に彩紋の俗○同ぐろ
とゆふ是なり○又二尺以下のものハ鮪種にて○よごといふ一尺余なるい
同じくそ○めだいちびと云本州に臭肉作脯名鹿頭又名臭肉と云
是同席となづくるあるたに仏ふう一説に目ぢとハ云眼の近さるう

鰤

まぐろと云その小(すこ)しきなるをまぐろとハその眼の黒きゆゑ名付に
鮪(しび)と訓り山邊赤人が藤井の浦にしび釣を詠ぜしもしびなり
鰤○此の魚乃小なる物を江戸にて○わかなごと云又武州房総にて
はまちと云又○つばすと云一尺程なるを西国にて○ハまちと云一尺
余り二尺ばかりなるを江戸にて○いなだと云相陸及奥州にて○ふくらぎと
いふ西国にて○はまちと云越中(ゑつ)にてはあらきなるを江戸にて○わらさといふぶり
を小陸にて○らぎといふ(正月の頃)二三尺及四五六尺なるを老ぶりと云

松魚

薩摩にて○そうじといふ小なる物を總にて○太かうをとも
かつを○一種○まだかつをといふは背の上に縦(たて)に白き筋三四條(すぢ)有もの
かつを也○たてまんだらと云又雲南にて○うづわとて小なる物有又○よ
これと云ふ今按ずるに○うづわ一名茶袋又きぶちとも云ふ其のなを銭
江戸にてハまるかつをと呼て賞之○鰹の別類やまとわと云ハめぢかと云魚の子也

河豚

ふぐ○京江戸ともに○ふぐと呼び東国及び西国にて○ふくとうと云又江
戸にて異名を○てつぽうと云ふ其故ハあたると忽(たちまち)死すと云ふ心也又○ち
ゐさいと云ふもの少(すこ)しきなる物なり越前の敦賀にて○ちんぷくとうと云ふ是之
又まふぐと云ふ魚ハ冬の内賞翫(しやうぐわん)とす○とらふぐと云ハ春夏ともに喰ふ也

鮊

いなだし○をむら女詞○とみて同断○あかいおしといふ物ハ塩をつけ
しろをと云肥前の長崎にて○からがさと云中国にて○やまとらと云京式
部いりと称して

「ひのもとにをやらせたまふいちしらづ京のぬ人ハあわしぞとせよ

玉葉集に住吉明神の御詠に

「いよのうみのこのしろの魚までも我ゆゑにハなせ世をまもらむ

鯷

ひしこいわしの属也○相模及西国にて○かたくちいわしと云又所によりて
は後河にて○くぶいわしと云上総にて○小いわし下総及常陸にて○せ

ぐろごとよぶ今按に上総の國にて小いわしと称すといへども子の義にハ
あらず又鰯の小きをも小いわしと呼ぶ秋をまて成長ところにまがふ
なるべしことを云ハ小きいわしの如しと云ことなるべし又西國の産物に
煮びしこと云て是ハこゝに云鯷にハあらず鰓といへる魚の子を塩漬
にしたる物也又鯷の小さき物を製したるをいふ也なを鰹の條下
を合せてみるべし又○ごまめと云物も是いわしにてハなしびしこの干し
る物也相模及越後奥の津軽にて○丁鰯と云紀伊國にて○いいごと云加賀
にて○かいづしと云九州にて○せぐろ又○片口とも云伊賀及伊勢辺にて
又奥州の田にて○田つくりと呼△按にごまめとハ常の称にて春の始に
小食ならびに又田作りなと唱へて祝し侍るも稲粱を植る物ゆへ丁鰯丁鯷を
こやしとす故に田つくりの名あり又ほうじとよぶハ黄の上に丁とも云く

青魚

かど 一名にしん○つくしにて○高麗いわしといふ又○せぐいほと云 河内氏
の云此魚あつまる時ハ沫を吹て水面に浮ぶ其の綿のごとし細子
ありて是をとる肢に子ありて満ず干て数の子と云和俗鯡の字を用ゆ
東海に出るをもつてなるべし今按に津軽にてなまにしんと云ハ干る
魚をにしんとよべる也蝦夷の小にしんと云も是なるべし又江戸にてかどいわしと云て
鰯の中に交りて有ることのごとし松前の猟家に問ひ侍しにかゝる猟ハ
おぼへぬると答侍りし

鱅魚

このしろ○此魚の小なる物を東都にて○こはだと云越前及九州にて
○つなしと云若狭播磨にてハ○なかずみと云此魚長崎に多し故になづく
筑前にて○えぶなと云又土佐の海に○ちらくと云魚も是ハこのしろの
しろと呼ふもの也又栴に鯯と云魚ハ江戸芝浦品川沖上総下総の
浦々より是を出せ西海にハこれなし鰶の子にあらず別種也駿河にて
つなしと呼ハ小鰶也此国にてこそこと云物ハ江戸にて○まるぞこと云魚なり

鰻鱺

このしろこそぶさうぞいハ兇昔稗殺之武人の云世俗に子生れて死し又生れてハ死ざる事なきがおよてハ子生る時胞衣を鰶と共に一所に地中に蔵むれバ其子成長せしむ其子一生このしろを食せざりしむこの志ろハ子の代なりといひつたへ侍り古哥に

「東路のむろの八嶋にたつ煙誰がこのしろにつなしやくらん

此哥につきてハ古き物なる事多く人の筆さるなれハ爰に贅せず

うなぎ○山城宇治まて○うぢまろと云此魚の小なる物を○めそうなぎと云是ハころずうなぎの澤てにて○めそと云上総にて○かよりと云又くろんよこをも云常陸にて○がよさと云信濃にて○もぐりと云土佐まて○をもうなぎと云今按に京都にてうなぎを鄙とハ宇治川のうなぎをまぐれともよぶに宇治麻呂と人の名をなても是にてハ淀川深川鰻の産を江戸前とよびて賞し他所より出るを旅うなぎと云又世俗に丑寅の年の生れの人ハ一代の守なる虚空蔵菩薩にて生涯うなぎを食する事を禁ずと云 徂来翁 ろかる遥 に鰻を八幡の使者猿を山王の使者と云るもぢちまんのぢさんまうのさをとりていへるなるべし麝を春日と云ふもかすがなるべしと也此書に倣て考るに丑寅の年の人うなぎを食ぬ事をいむハいにしへうなぎをハむなぎといひし虚空蔵の虚の字むなしと訓ずれバむなぎ誠いうしなるべしむハうにかよいにしへ梅ハうめ馬ハうまの仮名をそへしが後にむめむまと書もおなじことなり 萬葉集 に吉田連宜石麿といふ人のかたちをやせたるを殺ひて作る歌 大伴家持

「いしまろに吾もの申す夏やせによしといふ物ぞむなぎとりめせ

拾穂抄 にむなぎハうなぎなりと云又鳥を鵜といふ神と云越中ハ三山なり篤に深山島といふ山にとこて村里にうつりされハ三山と

海鰻

黄頸魚

深川おなじ所なれども神女ゐつきといひなれども捕ふ獵者のいとく尾長一宮にて鶏卵を合せて神代巻發端にてかるとて同津島にて八尋を合せてそのおの鳥の字島に書る事をよく〳〵考へ熟思ふ筍を合せて中まとゞけてまゝとかんべをもて弟べきにもたへどさいくゞ天下の神人を爲て紙に稼ることにたゝふすぎやとあり。

元箸の流言にあづかるべとゝへども弟のつゐでに訳て事を記して考へむ

うゝうかぎ○考内まて○海うかぎとゝ和名抄ハ伊豆熟海にて

○うゝぐちかとゝ桜及西ゝ海名にて○へんびとゝ海名この冗の事にあり漁人多く釣ことゝ毒あり之を作て演に拵蛇に似て毒よりて是を文ぎぐ○備あにて○ぎぐ東国にて○ぎぐうかにて○あいかが実にて○ざと東及越後にて○ちうを越おにて○あにて出羽にて○がだちと称にて○門だち伊勢にて○ぐぐとゝ佐にて○ぐぐとゝふ魚背

鯖魚

杜父魚

のゝに刺きて人を殺ごとく〳〵人これを捕る時ハ人これをはぐかかるしもをを出とゞ桜に事保十三年戊申秋東国所〻洪水也ところゝとゝ魚うせゝるゝ。ちふふして後鯖とゝ魚東ゝにまゝうゝふら〳〵はぎ鯖に変しゝる和名。

なまず○安房ゝ吉浜村にてゝなまずとのひゝ○にぜんぎ和ゝとゝ桜にはゞと敗本ゝるゝ事ゝとゝる日蓮宗ゝ流ゝ大乗法を受持て一切法華ハ二衛の経行なりと誹謗ゝ実に浄土宗門の在家ありて鯰をゝるゝぐゝと呼ゝるまぐゝとハ南方ゝ方ゝの名号ゝ略唱ゝれバそれゝ第ゝて日蓮宗の黒民ハにぜんきやうと呼ゝてやあらん

かぐら○京大坂にて○いしもちかぶハ○ごろ漁義にて○いまゝる伏見にて○門をゝぜ近江にて○むこゝどゝうまんゝいしぶしゝちこ九州にて○どんぞ筑おゝて○ねんまる越おゝて○かゝふつ出雲にて○ごゝ伊

かゝて○さてゝの浦り相模及伊豆後河上総下総陸奥ゑぞにて
○かしらとも後河浦津にハ○かしいとも今俗にハ魚種類多しき
水ゑにうて形さこうかいと大小の品ゝとの〳〵たゝ一類列名ゝ
にて当ゝとも鯊魚これ又ゑ類多し○まゝ也○二年物ゝとも乃風の沖
猶理にゝも物ゝ市に二年物ゝ意一ゝ歯ばゝちの名てどあるハゝ也におきき
呉名あればゝくゝて書ゝ又○だゝゝも也ハ下品也又○しま
くゝもとゝとゝもかしらゝ又ゝ鯛とゝ〳〵京

源語玉鬘巻にちゝきゝのゝ

鯛なごやゝの遠遠しゝのゝて下略

河海ちゝ紀州にハ加茂川とゝ名ゝ又下
加茂紀州の茶店にてゝを調味しゝてゝ書ゝ又かゝ
越おのゝち人ゝゝを能とゝてゝたゝゝ必ゝこれを地の能とゝ
の岩門などにて語本の伝るゝて年を経ゝゝてゝ能ゝ化と
とゝ〳〵ゝそれをゝち人ゝゝ本とゝゝ又かゝゝゝゝとゝ物ハ小海ゝて書者の

鮴魚

かまづゝ

倭名抄○京にて○かまづゝ物ハて○かまきゝとゝ又かゝ
ゝとゝ京ゝゝに似て又ゝゝすに似ゝゝ物をかゝゝとゝ
かゝゝ○京にて○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

吹沙魚

○ゝゝうゝゝゝゝゝにて○ゝゝ書ゝゝゝの名ゝの名ゝ
小魚ゝ形名ゝに鯛ゝ似て小さゝゝ大サ二三寸細ゝ長ゝ長ゝ尾ゝ

文鰩魚

あゝゝ

鯵

あゝ○紀州にて○ゝゝハゝ法ゝて○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にて○ゝゝゝゝゝ相ゝゝて○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
室津まゝ文ゝ掛る故ゝむゝあゝの名ゝ
ゝゝゝを○中ゝ及九国にて○あゝゝゝゝゝゝ月ゝを常ゝ

和加佐幾

産やとて一二月ごろ又乳のごとくなる子をうむ女はこれを食ふ

ろさぢ○後海にて○そこあの魚伯耆にて○ちくさぎ常陸にて○さ

くらうをとる按にちくさぎ又あまさぎ同類

あり二方の湖中にすくこれを獵とて又常陸利根川に鯊魚とこれを

江戸にそのふるさぢ也又備後尾道の市肴の部に鯊魚とこれハ

鯊の花茎のごとく出る魚をこれ鯊柳鮠なと共ごとくなるゆ

えいら○氣味にて○猫づら薩州にて○くまびき紀州の唐津にて

○かなやまと○いいをとこ作州にて○とうやくこと乾て賞敬とする時ハ

ち州にてもぐまびきとふ江戸にても猫づら又いいをとこ今按にこの

魚海船のかしらを泳ぐ船人急に釣竹をなげて忽ち得る事

を信よ九月迄とす事もこの魚の数あるをいふるべし

いぶ○米門及あまるていぶ漁法にて○かうら東国にて○さい

伊多

鰕

毛宮古

鯑

石首魚

又まるくとこの魚上総利根川にあり一説にさいを犀の角ごとくなる

ぶかきにたとふ九月ハ江戸より林をこれ川すかべ流に任せてとるにこと

へくりぺ今按にさいとハ材をもべしかもとへるもおのれこの魚の名に

よるの名なり

うぐゐ○伊豆沼湖水にて○あうをとこと相及箱根にて○あう

くらとこと小なる物をやまめとこと

もろこ一名ちまつと○をこと及武州にて○あぶらめとこと伊豆にて○ちろこ

なる又○もつごもこと近江坂本にてもろこ川とこと川ふなこの魚多し故にもろこ

と称とこ説ふ紫津に本宮我仲社ごの夫とをふるの日社の宮の小川

にて古人もろこ魚をとる数十艘を獲とあり

いしもち○京江戸ともに○いしもちとこと西国及畢出にて○ぐちこと後

河にて○ちろぐちとこと魚うちの中にあるをもつて名とす又江戸にて

鰻鱺

みな色いしもちと云ハ一種なり是ハにべと云魚の小なるものゝ
にべ○にべハ魚の大なる物を云 佐渡にて○ぐちと云大なる物を云京都にて○ぬべ
と云又○そちなり 備前にて○そこにべと云 にべとハ魚の腹中に鰾膠(にべ)ある
ゆへに名とす

鱝魚

ひし○常州水戸にて○ぬちかけと云 佐渡にて○鴻まいりと云

紅鰔魚

たゝべ○讃岐にて○あじろと云 紀州にて○とこやと云

鯱

えつ○東国にて○たちやと云此魚ハ蠅を好て食ふ故になづく但蠅食
西にてハ蠅魚にてハたちやと云

太刀魚

たちうを○筑前にて○なつだちと云

恵曽

えそ○伊勢の白子にて○たいこのぶちと云 佐国の土人○とかわ
とよぶ漁人のいふ 是ハ蛇の化したるものといふ又九月比にてとかげのかへる
の化したる也といふ 摂州にて五月の頃出るをとかげとよびて賞す

沙噀

武人忌そうなるの二本挿と合して食すれハ人を害すといふ今按に土佐
の国の俗この魚をおこぜとよふ是ハ蛇の嫉(とえ)といふところなるべし
なまこ○大坂にて○たらでといふ 筑紫にて正月ハ○たハらごと云 尾張
にて八正月十五日まてハ○たつたハらと云それより正月の末ハ○たハらと云
廣大和本草に沙噀和名タハラゴ今京都の魚舗(うをや)になまこといふ物
ありと見へたり今按に正月朔日海鼠(みまこ)をたハらごと賞して祝す是
米穀の義によりてなり まめを田つくりと称するも意同し

海鷂魚

えい○上方にて○えぎれと云 江戸にて○あかえいと云 今按に京にて
○えぎれといへるハ江戸にて赤えいのたちうをといふ物也 えいハ一種
あれども武州品川芝浦にて○まえい○よこさえい○がんぎえいなどゝいふ
まえいハ上品なり 又よこさえいハ菱形(ひし)にして色白し 故にまえいの
血をとめるにて鍼(ぢ)賞とす がんぎえいハ下品にて赤く悪臭(かく)有て

海鰕

其鰕の子ハまだ腹に在時ハ刺を中につゝみて角とらず菱實のごとく
にて有又生れての子ハわくさのごとく二ッわれにわれて刺を中に隠
せし物なり
ゑび○畿内にて○いせゑび関東にて○かまくらゑびと云又年の始
にかざりとする物ハ関東にてもいせゑびと云畿内にてハ是海の
老なれバいせゑびと呼又江戸にて小なる物を芝ゑびとよぶ大坂に
て○備前ゑびとよぶ

滲鮥　水亀　鼈

うえお　和名○畿内にて○うじと伊豆大嶋にて○海楊枝と云
いしがめ○西国にて○こうづとよぶ
すっぽん　これハ泥亀也　俗に胴亀と云○畿内にて○どんがめ又まるほんとも云
東国近江にて○どろう周防にて○まづめ伊勢にて○どち肥前にて○
どちがめ及紀州越中越後にて○がめと云西国にて○こがめ江戸

蝦魁

にて○すつぽんと云すべて東国にてすつぽんと云又かめうへと云加賀にて○
がざめ○畿内にて○がざことといふを江戸にて○まくぶ又海にて云
又西国にてくざことと云ハ甲菱形にして甲のまはりのとげのだに似たり
一種蟛蜞江戸にて○こめつきがにと云西国及四国にて○ほうち
がにと云壱岐にて○つきがにとよぶ是ハ一種豆蟹又蜘蛛蟹
と俗に云備前小豆島にて○いそがくしとの名あり按に豆蟹小にして形
又其子ちゝ蟹に似たる蛤蛤のうちに居て是を食ふ又蟹の小なるを蟹と呼
蟹の小なるをさつかにと呼ことをきかし是れ紀州にて○岩蟹と云漁事
とも猿蟹又畿内にて○びしこと云あり按るに漁師漁邊より室
蟹の塩辛をつくるびしこと云ハ蟹の鯷漬と云べきを略してひしこ
と呼といへり又ひしこと云るハ醢の誤なりといさゝかうたがふ又薩摩
指宿の濱に藻蟹とて小さき蟹を塩辛にして寸許にして色也相月紅

甲蟹

又ハ鎧海亭に制して手足を変ぜば甲及八足やハらかにして氣味香く定に上品なる物と又云薩摩八ひがさなどに作る
つぶらに○紀州にて○うんきうと云薩摩にて○ぢくちうにそのゝ
英産にて○いそほうづきと云九州の海にてゝ中ぶくと云汐干
の頃多し又大汐まだらよりて機に寄を見童らゝ人て縄をつけたハ
れ蟹ともてあそぶ又海ちのつきハうんきうの卵と云武州流木なきに卵を生
つけ雲と名付てうまれうはきとよびてハ女ゝ子ふくゝ作ゝ枕を飾
英産と称ぶ枕ともて色を深赤なるを海産ハ安房ふさうの出
をあぶて○桜清て○ゆもうづて○とう兵庫及播州にて○武文ハに
云懐乃て○平家蟹と云加賀越前にて○長門にて云これ元
弘の乱に秦の武文桜及兵庫の海に死を享禄四年細川高國と
云ゆと桜及に戦ふ細川の家臣和田村伯耆敵二人と挽人て庄崎浦

榮螺

ふ没を知にてれ等の説を好人附金をとる説とて
さゞえ○相模三浦三崎にて○つゞらと云さゞえのうちを用ひて
て○とうもいちと云元八寄物の載説に九一と云事を長り浦
里にて和八殘のうゝに用るゝの乾なを先に出と

鰒魚

あハび○上総にて○ひつけと云元八蛇の皮ふくゝて為貝につきて
ゝ為れ八貝つけとうよう貝つきかゝ
ゝる蛇をバ○ちゝろと云泉州境にて貝の殼を○あま貝と云これハ
海士のとる貝なれ八海産と云又蛇のふるる物をとてぶゝと云伝え
なれと云今称にとゝ八蛇の子に、あゝ作形ゝ又蛇のうゝを知也
にて角と云又あゝひめ貝の行なゝひと有に称せ一八[ゝま集集]に

哈喇

いせのあゝのあゝれゆゝるにりつゝてゝよあゝひの貝のゝるゝひたて
ゝまゝゝ○上総にて○ぜんゝと云貝全にて蛤の大なる物を中ゝまと云

浅利貝 朗光

小さきを大玉と云 先ハ雄蛤をとりてのちの貝を作りてハ雌蛤をだいと云

あさを貝○勢州にて。さゝゝの貝と云

さるぼ ○勢州にて。つめきを貝と云 紙ぼうにて。馬の爪貝とも云

ちぢゝ○紀州にて。ぜぐろと云 古方には亜面に近き所ぜぐ貝と云

蜆

ハ稀にて勢州にて。ゆ猪面に近き所ぜぐ貝と云

鹽吹貝

ちぢきの○伊勢にて。えび貝と云 紙ぼうにて。つぶと云

多伊良木

たらぎ○大坂にて。ちぼ貝と云

田螺

たにし○紀州及西国東武共に外国にて。さゝと云 古方にてハ

寄居虫

一名因貝と云 小国及武州 相模 伊勢路にて。因つぶと云 又

つぶと云 和名に拾遺本草を引て。因つぶ云 又

ぐうみ 一名やどりて○伊豆及駿河にて。いうものと云 紙ぼうにて。ぐうみ

蠣

とりよ 肥前にて。かうざい貝とも云 和名かうか

細螺

まて○大坂にて。かゝとも貝と云 上総にてをかゝ

きさご○中国にて。いちがい。こうゝ 伊勢にて。ごうがゝと云 紀

の唐津にて。こぼゝと云

石蜐

かめの手○ほくにて。志ゐと云 武蔵 品川にて。いしでと云 上総

にてたこの子と云 ちゐと八手枝 相模の方にて。多ゝうに作る 所名づく

海馬

うまご○伊勢にて。たつのをとゝ ごと伊勢にて。能の猶と云 義用

にて。うゝもまとゝぶ 是婦人安産の守とす

和尚魚

をしやうを○武州にて。ぐうぼうと云 上総 紙ぼう浦にて。正覚坊と

いふ 漁人のこむかい 信濃 ぼうと 遊魂 ことに止まりたまく 孤

容泥鬼のごとくにて 写れ 指つゝ びて 猫のかしれを捕ゆる

時ハ漁人ひろれて酒を飲せて命をたすく 三才図会云 東洋大海中有

和尚魚ニ状如鼈其身紅赤色ト云

蝸牛

かたつぶり○五畿内にて○でんでんむし 播州辺九州四国にて○でのむし
周防にて○まいまい 駿河沼津辺にて○かさぱちまいまい 相模にて○でんぐ
らく 江戸にて○まいまいつぶり 同隅田川辺にて○やまだにし 常陸にて○ま
いぼろ 下野にて○をゝぼろ 奥州南部にて○へびのてまくらといふ 今按に か
たつぶりハ和名なり でゝむしといふハ殻など背に負たる貝より頭出して おふり
かろくと声を発していふ詞也 かりくと鳴て頭をふるものなれど
かたつぶりといへる意はかたつぶりとなづけたるものゝハ助字なるべし 予陽
田川の辺に寓居(ぐうきよ)せしころかれを見て句あり 又晋其角か
「文七にふまるな庭のかたつぶりとせし句ハ寂蓮法師の
上の五文字をかへて俳諧の句となしたるとぞ
「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角ありとても身をなたのみそ

蛞蝓

なめくぢり○常陸にて○まいまいつぶろ 越後にて○山なめくじりと云 山中には
たけ五六寸許のものありと見えたり 箱田なめくぢり 夏月屋上に這ひのぼりて
螻(けら)蛄と変ずるといへどもことごとく不然

蛇

へび○畿内及西国にて○くちなは 東国にて○へび 薩摩にて 女の詞に○
たろうむしと云 家(や)くちなはといふハ屋上にありて鼠を追ひ雛(ひよ)を捕
るもの是黄頷蛇(くわうだんじや)也 近江にて○さとまはりと云 播州にて○ちよろぶそといふ
伊予の国にて○ちよみびそ 又○ねずみとりと云 筑前にて○やぶつこと云 一種赤
棟蛇にて○山かがちと云 近江にて○しまへびと云 又一種 巨蛇(にしや) 和名をろち
東国にて○わうだいしやうと云 近江にて○あをそと云 又一種 黄頷及
赤棟にて○かのこへびと云を安房にて○もぐろへびと云 筑前にて○う
しぐちなはと云

蝮蛇

まむし○西国にて ひらくちと云 筑前にて○えめと云 土佐にて○えこ

又くつてこと云上総房州にて○くちたこと云是和名たこ迄又一種佐ま
○ひぐ形ととゝもち佐にて○日こぐとゝ小ゝして錦色なるゝもの〻人も
にさくるゝ時ハ目をあくるゝ〻ゝ死をとゝんにて目くゞずと云こと漢名烏尾
蛇これなり

蛇蚺

うだぐこ○出羽にて○ぎやだこと云小田にて○をうだこと云

蜥蜴

とかけ○武門にて○とかけ東国にて○かるへび又かまきつてり赤
にて○かまきりを西國にて○とくぎりうたわにて○とうきぶりにて八○とかげ
とけの字を濁りてよぶ一種にてとけとゝ背をこどりにして光り
縦斑の文を股間〻口大に毒出るなり

蜂

えち○仙蜂にて○もぐりと云

馬蜂

くまぐち○仙蜂にて○お酒くさぐちと云越後にて○あんどん蜂と云

蠮螉

おろばち○武門にて○こうばちと云信濃

蠶蟲

にて○かそうと云信濃にて○ぢまがりと云東武にて○おつばちと云
日本紀螺蠃又中庸蒲盧の説古語拾遺に東雅に本朝式
をもつてまがるの字とつかハ別今の細太刀と云抱又さそうとも抱さ
こゝろ常陸にてかそうとつもさそうと伯耆にて伯耆にてハ
黄ばんにさそうとも云きたにてハ
かいこ○東国にて○れこと云越後にて○うすまと云因幡にハ
○ぼこと云信濃にて○ぼぐと云奥羽津軽にて大なるゝもの○こう
どこと云小さ物を○さんこと云出羽にて○ひめこと云
今按に丹後国桑田郡大原社ハ蠶飼明神と号し信仰する神なり
毎年六月十八日たぐりこと云祭人数多集て二日と春蚕
云系絡のものを社地の小石を猫と名付て備て下田と云ハ蠶
蠶のつゝみ呪ちぐ〻九月十二日をハ秋ぶ〻と云て一ようにてこゝび

治事を又極月晦日の夜家の大黒柱に灯をともす家もこれ亦に婦人の産をたすけんとを怖るゝを起りたるなるべしまた墓もひこにつくるものとて青に

「釣すこかひやうに昭憲皇太后の御歌」

一説に蓍の茎を篩ふして蚕飼の棚を初めの日に十四五の小女年の年なるに掃はれバ蚕の糸綿成就すると云

茅葉に大体茅葉

また春の初めの子のむたてきと泳せ一ハ此之又東国にて蘭玉とて正月十四日に餅を製し柳の枝或ハ竹の枝などに付て蘭ふかゝ是を祝ふことゝ又蚕ハ春より夏ゝ又夏の蚕ハ秋に至て成るものなれハ和歌にて八重ゝ咲もまゆを作りていとふ事とゝ又蚕の蝶ま紀と云和歌にて。ひるろ|と云上野及信濃陸奥にて。ひるとゝ伊勢にて。ひいろと云又かひこハ蚕を出付て蚕糸綿をとめて蚕

物ゝれバ婚姻にめてふをそゝを用ゐる事神家の大事とゝ八市の時とゝ乃ゝ人も有ゝ又めてふを実ハ蝶をゝとの言

てふ○相模及下野陸奥にて。てふまゝと云ハ蛾をゝ。かべゝ。てこゝとも云出羽秋田にて。へらこと云越後にて。てふまゝ蛾ゝと云信濃にて。あまびゝと云一種風蝶ゝを形大にして黒羽の縁に交ゝ之上総にて。ちゝでゝてふゝと云下野安房にて。ちゝでゝてふまゝと云常陸にて。かゝまゝてふゝと云蛾ゝを云ゝ山でゝてふゝと云ゝ桜に味移ゝ多ゝ一ゝ虫ゝ蝶和名かびらゝ之相模にて。ゝ為ゝと云駿河にて八市ゝより出て味くゝ出ゝこゝ云これらの酒ハかハびゝと云器にてひゝ又為ゝと称ゝ又為ゝと称ゝてゝこゝとなゝるゝ物なゝ又胡蝶と云胡字八其鬚を蝶ゝ色江戸にてハてふゝと云一説ゝ蝴八てゝ之蝶ゝとゝ之ゝ為て蝶ゝと云

て呼ともいふ

とんぼう ○東武仙臺南部さて。あけづと云津軽さて。だんぶう
と云常陸及上総甲州さて。げんざと云あきさて。ゐんぐと云一種絣蠻
武州さて。絣蠻とは云ふ東武さて。かまとんぼと云伯耆さて。かうや
ひげまと云又一種東武さて。赤卒と云和名あかゐもむし参州さて。
ちやうまとうやんまと云あきにて。ちやうまとうゐんと云常陸上野
下野辺さて。いなごんざと云越後さて。こゑ〳〵とんぼと
云奥州さて。なんだはげづと云尾張さて。たのうえとんぼと云又一種
江戸さて。ちやとんぼと云武州さて。んもがらあげづと云肥前さて。
ちやとうとんぼと云又たゐる物と。馬大頭と云ふ信濃さて。ちんだぼうと
いふ越後さて。山とんぼと云江戸さて至って大なるを。鬼やんまと云
ふ佐さて。うやんまと云是さ

東雅 曰蜻蛉いまへあきつと云ふ

げろと云即今云とんぼう 東国の方言に えんぼと云赤卒をいふる
げんざなどもいふなりあきつと八秋に出てを秋の元多なれば秋津
と云つ 助字に いなごんざとも云ふ稲蝗 ちゐる 叫ふるを也少ごと八名
なの特名 ちゐ 紀のやんまとも云ふ稲蝗 ちゐんぐの略ぜし ちんぐ八即名ぜ
なを八名ぐとも云ふめーとの略ぜ
かさるれる羽とも云ふ色ふきはなて細くかきなるまむしの名にも羽をとる
抜て出るものを即今とんぼうふ
ふとんぼの

南留別志 ふ時蜻蛉をとんぼうと云ふ八吾 邦の名と秋
津洲とふ所に東方とのことも
つくぐだし ○上野さて。おつてうと云ふ江戸さて。つくつくびーと云ふ
故に俗称名とうとうと蜻蛉のうとんと称ーとひーハつくぐだし

和名 とうとんぼう

菊蜩

ひぐらし○上総にて○こうろぎ

蟋蟀

こほろぎ○南都にて○きりぎりす

こゝ武州府中辺及信濃辺にて南北にて○きりぎりすと云越後国にて○つゞれさせこと云奥州にて○きちこゝろと云又たゝかろぎとよび○八月ごろ白居前日芝居にて云さりくとも云又たゝかろぎとよび○八月ごろ又古い稲つきこまろとよび○八月云きりくとも小児竈にやなかとのゝ

蠅虎

いとゞ○奥にて○くろ〳〵伊勢及京にて○かまどうま○尾張にて○かまどうま遠江にて○かんなごと云也○くろつゞと云また古ころぎとよび物しらふこゞろぎの稲刈りて少ある稲に竈のあるまたとも

蟷馬

はさかりむし○伊勢にて○やまぎりと云也○うりもと云秋田にて

螽蚱

小児○きりぎりすと云東にて○きりもぐりと云又○ぎつちょと云又ぎつちょとも云奥のぎいとうと云ぎいとうと云稲刈る時きの赤ちゃんと云ぐく小麦の音に似ようとていまこはさかりめさよびもいまきりぐりと云

はたゝ〳〵○伊予にて○がちゃ又○ぎつちょ又○ぎりぎりすと云郡にて○ぼうさと云伊勢及京にて○ぎりぎりすと云奥州にて○がちゃきと云伊勢にて○

紡虫

紡ぎとめと云奥州仙台にて○ちりぎりと云信濃にて○とうぎりと云出雲にて○ほうけめと云長崎にて○たかだかと云

蟷螂

くびまき○一名いとくり伊予にて○むまとひと云也○すいとくりと云

たかまきり○一名いかまきり○伊予にて○かまきりと云秋田にて○ちいとも

むし○信濃にて○かまきりと云相模にて○いぼ

出羽酒田にて○いぼ肥前にて○ばくひ勇助にて○いぼ

蝦蟆

病疫者住ニ捕ニ蟾蜍一食ヲ云云

かえるつかへる○仙覺ていはく○びつきと云和国ていはく

びきと云佐て○いきゝなんびきゝなんやゝたらくなくゝ云又一種小くて色

にして本竹の根に棲ものを雲東及奏国て○ちゝ鳴と云九州て○かと

げびきゝわらびきと云薩て○あをびきと云人ゝ国に但馬国也一種

○河蝦とよぶこれ川の流ゆるゝて濁るゆゑに生まぬものゝ多く庫に住り

故に河蝦と呼魚に同名ゆゑ別物也常の蛙の雌を用へ別物也常の蛙

なりをとゝむとなり肥前ていこれをかいつと呼豆を蛙の蛙をバ如へるゝ呼ゝ点欲ふ

蛙なくよりつ川の流のたにとよゝ又ゝ川の落ち流れゆゑ涌る故是俗山蛙

常の蛙ハ声かまびすしく山蛙ハ声清く寂しくしてあるて庫の多ゝ鳴ゝ

ものゝ鳴くともきこゆる物なりとゝ

無名抄 小井堤の蛙の故事ゝ

是山蛙ゝ近年江戸にもあるやとていまゝ不知

蟾蜍

いきびゝる○又奏門及奏王又ハ越路なりて○ふゝ出ると云伊勢伊路

て○いきこゝ和て○わくどうゝ又ゝどうゝ又わくゝひきゝ又ゝ鬼れ

どうゝ又牛ゝどうゝなと云佐て○くつひきゝ又ゝやどりなとゝ奏東

○ひきぶゝ又びつきゝ又だいてんゝいなゝふゝ出ゝ秋田て○ゝ月けと云房総て

○あんかうゝ又ゝをうまびるゝ又ゝふくあんゝ京ゝ武ゝ八王子て○ゝ山あんこうと云上野

にて○大ひきゝ又ゝ小ゝるゝを○ゝ蛙ゝとゝ云武ゝ八王子て○ゝ山あんこうと云上野

むゝで○ゝ蛙て○えぐちゝと云**日本紀**ゝ出 ○ひきゝ蛙

蜈蚣

馬陸

をゝむゝ○ゝ雲和にて○ゝをゝむゝ雲東にて○やゝて肥前て○ぐゝ

らゝと云

鼓虫

まゝくむゝ○ゝ居ゝて○ゝふゝとゝまゝゝ同ゝて○ゝふゝをゝとゝあゝ系にて○ゝうゝづ

むゝ泉ゝ堺て○ゝごゝまゝいゝむゝ○ゝたゝ○ゝいゝゝら紀ゝ和ゝ及ゝ云

越前て○まゝゝ東近ゝて○ゝこゝ

ゝこゝゝ又○ゝゝゝ

水黽

うきむし 薩摩にて○ごさ……なし○さなぎと云 又

志けく 伊勢にて○たまる 上総にて……花にて○こゝのまひ 薩摩

及紀前にて○ごきあらひむしなどと云……かく土佐にて かじみ西

まうかじめぐりてうづまくなかし

てうまひ○出羽にて○こうとまし 又かつをむし 江戸にて○うふまひむしにて○

しやうり 又あめんぼう 又だいりやうせんかまし 江戸にて○しおやん

しほうり 出羽にて○あめんぼ 越後にて○しほのこ 信濃にて○あしたかな佐にて○

しやうりき 薩摩にて○あめんどう 上総にて○こぶぐろま 又かなごに 武蔵にて○

飛蛾

かいこもこれは たぐひなるゆゑに似てはなはだ火のかとどもしろく虫也

こがねむし○ほくてにて○ぶどうむしと云 肥後にて○かなぶりくとよぶ

夏の夜油灯に入て灯を消ものあり

兜虫

かぶとむし○江戸にて○かぶとむしと云 伊勢にて○やどどうと云 大和にて

○うのむしと云 此虫ハ皂莢(さいかし)の樹(き)に住むしにて羽ありて能飛ぶ 頭ハ甲を冠り 眼ハ角あり

但さいかしハ実あるをさいかちと云ふ樹也

蚰蜒

あぶらむし○伊勢にて○ごきかぶりむしと云 薩摩にて いまめ

肥前にて○ごきかぶりと云

鬚虫

けむし 一名かはむし○京にて○かうがいむし 出雲にて ちる夕笠むしと

○ひげむし 又ゑとこ○とげむしと云 奥の津軽にて○がいぶらと云 今按

に泉州堺にて六月大暑の比 人家の屋根へはひのぼる けむしの名を

○だこうろうと云 毒虫也 家に入て だこうもり 深く着 都を包て

西国ならびに海をまもる 蝋をとりてかゐむしなどと云る事

又武蔵の内にて毛虫の 所といふ家多し きん六日六月

信濃の国に出るをしもと云 是虫にいたる

つくりて

蝼蛄

げら○京にて○土蜘
曰能蛾を屋上に上
ふ人びとよくもてあそ
をあるものあり
ことにて実る況人のたとへ
なぞらふ人げらとのいひ傳の事なるべしあらず

物類稱呼二終

蛾の名技を說て
れて毒をきはめるるわ
ふうど能く穴をうがてども分
ことあるべず是を能蛾
ふ文法にもげら
といふ事